



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

3

質的研究のための エスノグラフィー と観察

マイケル・アングロシーノ

柴山真琴 [訳]

エスノグラフィー研究をする者は、
客観的なデータ収集と主観的な洞察
とのバランスをとりながら、
人々の日常生活の参与観察者となる——

フィールドサイトの選定から報告書の作成まで、
倫理的問題や 21 世紀のエスノグラフィーの姿にも配慮しつつ
参与観察を伴うエスノグラフィー研究の鍵となる事項を
具体例を示しながら掘り下げて解説

新曜社



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

3

質的研究のための エスノグラフィー と観察

マイケル・アングロシーノ
柴山真琴 [訳]

新曜社

DOING ETHNOGRAPHIC AND OBSERVATIONAL RESEARCH

Michael Angrosino

SAGE Qualitative Research Kit 3

Copyright © Michael Angrosino 2007. All rights reserved.

This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.



編者から

ウヴェ・フリック

- 「SAGE 質的研究キット」の紹介
- 質的研究とは何か
- 質的研究をどのように行うか
- 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

「SAGE 質的研究キット」の紹介

近年質的研究は、そのアプローチがさまざまな学問分野にわたってしだいに確立され、尊重されるようになってきたため、これまでになかった成長と多様化の時期を謳歌している。そのためますます多くの学生、教師、実践家が、一般的にも個々の特定の目的のためにも、質的研究をどのように行ったらよいのかという問題と疑問に直面している。こうした問題に答えること、そしてハウターのレベルでそうした実際的な問題に取り組むことが、「SAGE 質的研究キット」（以下「キット」）の主な目的である。

この「キット」に収められた各巻は全体が合わさって、質的研究を実際に行う際に生じる中心的な諸問題に取り組んでいる。それぞれの巻は、社会的世界を質的な見地で研究するために用いられる主要な手法（たとえば、インタビューやフォーカスグループ）や資料（たとえば、ビジュアルデータやディスコース）に、焦点を当てている。さらに、「キット」の各巻は、多くの多様なタイプの読者のニーズを念頭に置いて書かれている。「キット」とこれに収められたそれぞれの巻は、以下のような広範なユーザーに役立つだろう。

- 質的な手法を使った研究を計画し実行する上で問題に直面している、社会科学、医学研究、マーケットリサーチ、評価研究、組織研究、ビジネス研究、経営研究、認知科学等の質的研究の**実践者**たち。
- こうした分野で質的手法を使用する**大学教員**。授業の基礎としてこのシリーズを用いることが期待される。
- 質的手法が、実際の適用（たとえば論文執筆のため）を含めて大学の学業訓練の（主要な）一部である、社会科学、看護、教育、心理学、その他の分野の**学部生と大学院生**。

「キット」に収められた各巻は、フィールドでの広範な経験をもつだけでなく、その巻のテーマである手法の実践においても豊かな経験をもつすぐれた著者たちによって書かれている。全シリーズを最初から最後まで読むと、倫理や研究のデザイン、研究の質の査定といった、どのような種類の質的研究にとっても重要な諸問題に何度も出会うことだろう。しかし、そうした諸問題はそれぞれの巻において、著者の特定の方法的視点と著者が述べるアプローチから取り組まれる。したがって読者はそれぞれの巻で、研究の質の問題へのさまざまなアプローチや、質的データの分析のしかたへのさまざまな示唆を見出すであろうが、それらが全体として合わさって、この分野の包括的な描写を得ることができるだろう。

質的研究とは何か

質的研究のさまざまなアプローチにも研究者の大多数にも共通に受け入れられている、質的研究の定義を見出すことはますます困難になっている。質的研究はもはや、たんに「量的研究ではない」研究ではなく、それ自身の一つのアイデンティティ（あるいは多数のアイデンティティ）を発展させている。

質的研究には多数のアプローチがあるとは言っても、質的研究に共通するいくつかの特徴を確認することができる。質的研究は「そこにある」世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、「内側から」社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する。しかしそのやり方は実にさまざまである。

- 個人や集団の経験を分析することによって。経験は生活史や日常的・専門的実践と関係づけられることもある。それらは、日常的な知識や説明や物語を分析することによって取り組まれるかもしれない。
- 進行中の相互作用とコミュニケーションを分析することによって。これは、相互作用とコミュニケーションの実際の観察と記録、およびそうした資料の分析に基づく。
- ドキュメント（テキスト、写真・映像、映画や音楽）を分析することによって、あるいはドキュメントに類した経験や相互作用が残した痕跡を分析することによって。

このようなアプローチに共通するのは、人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みることである。相互作用とドキュメントは、協同して（あるいは衝突しながら）社会的プロセスと社会的人工物を構成する方法と見なされる。これらのアプローチはみな意味生成の方法であり、意味はさまざまな質的手法で再構成し分析することができ、そうした質的手法によって研究者は、社会的な（あるいは心理学的な）問題を記述し説明するしかたとしての（多少とも一般化可能な）モデル、類型、理論を発展させることができるのである。

質的研究をどのように行うか

質的研究にはさまざまな理論的・認識論的・方法論的アプローチがあること、そして研究される課題も非常に多岐にわたることを考慮するなら、質的研究を行う共通の方法を示すことはできるのだろうか。少なくとも、質的研究の行い方に共通する、いくつかの特徴を挙げることはできる。

- 質的研究者は、経験と相互作用とドキュメントに、その自然な文脈において、そしてそれらの個々の独自性に余地を与えるようなやり方で、接近することに関心がある。

- 質的研究は、最初から研究する事柄についての明確に定義された概念を用意し、検証仮説を公式化することを控える。むしろ、概念（あるいは、もし使うなら仮説）は、研究の過程で発展し、洗練されてゆく。
- 質的研究は、手法と理論は研究される事柄に適したものであるべきだ、という考えのもとで始められる。既存の手法が具体的な問題やフィールドに合わないなら、必要に応じて修正されるか、新しい手法やアプローチが開発される。
- 研究者は研究するフィールドの一員であり、研究者自身が、研究者というあり方でそこに臨むという点でも、フィールドでの経験とそこでの役割への反省を持ち込むという点でも、研究過程の重要な部分である。
- 質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と事例を重視する。多くの質的研究は一事例研究や一連の事例研究に基づいており、しばしば事例（その歴史と複雑さ）が、研究されている事柄を理解する重要な文脈となる。
- 質的研究の主要な部分は、フィールドノートやトランスクリプトに始まり、記述と解釈、最終的には知見の発表、研究全体の公刊に至るまでの、テキストと執筆に基づいている。したがって、複雑な社会状況（あるいは写真・映像のような他の資料）をテキストに変換するという問題（一般には文字化と執筆の問題）が、質的研究の主要な関心事となる。
- 手法が研究されている事柄に適切であると考えられる場合でも、それが質的研究にとって、そして質的研究の特定のアプローチにとって適切かという視点から、質的研究の質を定義し査定する諸アプローチについて（さらに）考察されなければならない。

「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

- 『質的研究のデザイン』（フリック）は、何らかのかたちで質的研究を使う具体的な研究をどのように計画し、デザインするかという観点から書かれた質的研究の簡潔な入門書である。それは、研究過程でそうした諸問題をどう扱うか、どう解決するかに焦点を当てることで、「キット」の他の巻に対するおおよその枠組みを与えることを意図している。こ

の本では、質的研究の研究デザインを作るという問題に取り組み、研究プロジェクトを機能させる足がかりについて概略を述べ、質的研究における資源といった実際の諸問題について述べるが、質的研究の質といったより方法論的な問題や倫理についても考察する。この枠組みは、「キット」の他の巻でより詳しく説明される。

- 質的研究におけるデータの収集と産出に、3冊が当てられる。第1巻で簡潔に概説した諸問題を取り上げ、それぞれの手法に対して、さらに詳しく、集中的にアプローチする。まず、『質的研究のための「インター・ビュー」』（スタイナー・クヴァール）は、特定の話題や生活史について人びとにインタビューすることのもつ、理論的、認識論的、倫理的、実践的な諸問題に取り組んでいる。『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』（マイケル・アングロシーノ）は、質的データの収集と産出の第二の主要なアプローチに焦点を当てている。ここでも実践的な諸問題（サイトの選択、エスノグラフィーにおけるデータ収集の方法、データ分析における特殊な問題）が、より一般的な諸問題（倫理、表現、1つのアプローチとしてのエスノグラフィーの質と適切性）の文脈で考察される。『質的研究のためのフォーカスグループ』（ロザリン・バーバー）では、データ産出の第三のもっとも主要な質的手法が提示される。ここでも、フォーカスグループでサンプリングやデザインやデータ分析をどう行うかの問題と、データをどうやって生み出すかに焦点が強く当てられている。
- さらに3冊が、特定のタイプの質的研究の分析に当てられる。『質的研究におけるビジュアルデータの使用』（マーカス・バンクス）は、焦点を質的研究の第三のタイプに広げている（インタビューとフォーカスグループに由来する言語データと観察データに加えて）。一般に社会科学研究ではビジュアルデータの使用は主要なトレンドになっているだけでなく、データの使用と分析にあたって研究者を新たな実際的な問題に直面させ、新たな倫理的問題を生み出している。『質的研究におけるデータ分析』（グラハム・R・ギブズ）では、どのような種類の質的データの理解にも共通する、いくつかの実際的なアプローチと問題に取り組む。特にコード化、比較、コンピュータが支援する質的データ分析の使用

に、注意が払われている。ここでの焦点は、インタビューやフォーカスグループや個人史と同じく言語データにある。『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』（ティム・ラブリー）では、言語データから、ディスコースに関連する異なるタイプのデータへと焦点が拡張され、ドキュメントのような現存資料、日常会話の記録、ディスコースが残す痕跡の発見に焦点が当てられる。アーカイブの生成、ビデオ資料の文字化、それにこのようなタイプのデータのディスコースの分析のしかたといった、実的な問題が考察される。

- 『質的研究の「質」管理』（ウヴェ・フリック）は、質的研究の質の問題を取り上げる。この問題は、「キット」の他の巻でもそれぞれのテーマの文脈で簡潔に触れられているが、本書でより一般的なかたちで取り上げる。ここでは研究の質を、質的研究の現存の規準を使って見たり、あるいは規準を再定式化したり新しく定義するといった角度から検討する。この巻では、質的方法論における「質」と妥当性を定めるのは何であるべきかについての現在も進行している議論を検討し、質的研究における質を高め、管理するための多くの戦略を検討することになる。質的研究におけるトライアングレーション戦略と、質的研究の質を高めるという文脈での量的研究の使用に、特に関心が払われている。

本書の焦点、そしてそれが「キット」に果たす役割について概略を述べる前に、この「キット」が世に出る力添えをいただいた SAGE 社の方々に感謝を述べたい。いつのことだったか、このプロジェクトを私に勧めてくれたのはマイケル・カーマイケルであるが、いざ始めるに当たって彼の示唆は非常に役に立った。パトリック・ブリンドルはこのシリーズへの支援を引き継ぎ、継続してくれた。ヴァネッサ・ハーウッドとジェレミイ・トインビーは、われわれの草稿を本に仕上げてくれた。



本書について

ウヴェ・フリック

エスノグラフィー^{〔脚注〕}*と参与観察*は、近年の質的研究の発展においてばかりでなく、その歴史の中でも、主要な役割を果たしてきた。フィールドにおけるさまざまな関係、フィールドとそのメンバーに対して開かれていること、研究はどこに向けたものであるのかなどに関する知識の多くが、エスノグラフィーによる研究によって得られたものである。エスノグラフィーは参与観察の方法と密接に関係しており、かつてはそれを基本としていたし、最近では参与観察に代わるものになってきたとも言えるが、常に多様なデータ収集法を含んでいた。エスノグラフィーでは、しばしば観察、参与、フォーマル・インフォーマルなインタビュー、文書資料、その他出来事の痕跡の使用が組み合わされる。しかし、エスノグラフィーや参与観察を使えば、どのような問題にも接近できるというわけではない。サンプリングを考えてみても、観察に必要なフィールドや施設——より一般的には観察サイト——の選定に比べると、研究する人々を選ぶことにはそれほど重点が置かれていない。20世紀末にかけて、エスノグラフィーの研究方法をめぐる議論は、データ収集やフィールドでの役割を見つける問題から、フィールドについて書き、フィールドから報告するという問題へとますます比重が移っていった。エスノグラフィーのデータ分析では、人々の行動、相互作用、実践のパターンを見つけることに関心が向けられるようになった。

本書では、このようなエスノグラフィーによる研究と観察研究の鍵となる事項について、掘り下げて解説されている。本シリーズの他の巻では、イン

〔訳注〕 右上にアスタリスクが付されている語は、巻末の用語解説に含まれている。適宜参照していただきたい。

タビュー (Kvale, 2007) やフォーカスグループ (Barbour, 2007) のような言語データ、あるいは会話分析 (Rapley, 2007) やイメージ分析 (Banks, 2007) に焦点が当てられているが、本書ではフィールド研究の実際を取り上げる。同時に、エスノグラフィーのもっと一般的な文脈でこれらのデータ収集法（インタビューからビジュアルデータまで）を用いる方法についてのより詳細な分析が本書の補完となるだろう。データ分析 (Gibbs, 2007) と質的研究における研究デザインと質 (Flick, 2007a,b) についての巻には、本書で概説された内容がより詳しく説明されている。すなわち本書は、本シリーズの他の巻と一体となって、エスノグラフィーと観察をいつ使ったらよいのかを判断するのに役立ち、フィールドでのエスノグラフィーと観察の使い方やその方法論的・理論的基礎を提供しているのである。また、本書で説明のために繰り返し使用される研究例は、エスノグラフィーを1つの方法としてではなく研究方略として捉え、エスノグラフィーがどういう研究テーマやフィールドに適しているのかを理解するのに役立つものである。



はじめに

「エスノグラフィー」は、研究の方法と研究の産物という2つの意味を持っている（Agar, 1980）。

方法としてのエスノグラフィーは、コミュニティの有形のモノ、社会的関係、信念、価値観などに関する情報の収集を意味する。データ収集には多様な技法が用いられる。実際、可能な限り多様な観点からデータを集積するアプローチが望ましい。その事柄がよりよく裏付けられればそれだけ、それが実際にそうであると言える。

産物としてのエスノグラフィーは、エスノグラフィーの方法で収集した情報をコミュニティの文化*の包括的な記述へと統合した報告書である。報告書は伝統的にモノグラフのかたちをとってきたが、写真集、映画やビデオ、博物館での展示、ウェブサイト、さらには文学作品（小説・演劇・短編・詩）や芸術的なパフォーマンス（ダンス・詩歌）の形態もとり得る。

エスノグラフィーによる研究は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、人類学者によって開始された。それ以来、社会学、社会心理学、コミュニケーション、教育、ビジネス、衛生などの多様な学問領域で、質的研究者の道具一式の一部となった。エスノグラフィーでは、対象とする人々についての詳細かつ包括的な記述を追い求めることから、エスノグラフィーは典型的に、研究対象とするコミュニティ（しばしばフィールドサイトと呼ばれる）に長期間滞在できる研究者によって採用されてきた。そのためエスノグラフィーは、フィールドワーク*とも呼ばれる。

エスノグラフィーを行うフィールドワーカーは、しばしば客観的なデータ収集と主観的な洞察とのバランスをとりながら、研究対象とする人々の日常生活に関わる**参与観察者**となる。確かにエスノグラフィーの方法は、フィールドに参与しないタイプの観察でも使うことができるが、本書では、フィールドに参与しながら観察する研究者（参与観察者）が行うフィールドワークを主に取り上げる。

すなわち本書では、

- 特に参与観察者としてのフィールド研究者に力点を置いて、エスノグラフィーに関する多様なデータ収集の技法を紹介する。さらに、
- サイトの選定から最終レポートの作成まで、エスノグラフィーのプロセスについて解説する。

また、本書には次のような特徴がある。

- エスノグラフィーに付随する倫理的諸問題に配慮する。フィールドワーカーは、コミュニティの活動に関わり合う参与者としての立場と、その活動を客観的に見る観察者としての立場との間のバランスを、常に意識していなければならない。また、エスノグラフィーは、各組織体の倫理委員会が定める臨床的・実験的研究者モデルに必ずしもぴったり合致するとは限らない。それゆえに、生活の場であるコミュニティで研究を行う際のインフォームド・コンセント*や秘密保持の問題に対処する方法について検討する。
- 21 世紀のエスノグラフィーについて議論する。人々は、もはや小規模かつ自己完結的で特定の場所に限局されたコミュニティの中だけで、生活しているわけではない。コミュニケーションや輸送の技術の進歩によって、グローバルなネットワークの中に組み込まれている。それゆえに、伝統的なエスノグラフィーの方法をグローバルなサイバースペース^{【訳注 1】}時代の「バーチャル」コミュニティでの研究に適用する方法について検討する。
- 説明をわかりやすくするために、具体的なデータ例を用いる。読者にエスノグラフィーの方法を説明することと、教科書に書かれた理想的な指針を実際の研究の状況で具現化する方法を示すこととは別物である。そのため本書では、説明的記述のたびに、著者が身近なコミュニティで行った研究プロジェクトとそうではない伝統的なコミュニティで行った

【訳注 1】 全世界のコンピューター・ネットワークのなす空間のこと。

研究プロジェクトを比較・対照しつつ、著者自身のフィールドワークで得た記述を手短に引用しながら解説する。

さらに学ぶために

以下の文献は、エスノグラフィーの古典的な教科書である。

Agar, M. (1980) *The Professional Stranger: An Informal Introduction to Ethnography*. San Diego: Academic Press.

* 訳者補遺

箕浦康子（編）(1999)『フィールドワークの技法と実際：マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房

中村雄二郎 (1992)『臨床の知とは何か』岩波新書

佐藤郁哉 (2006)『フィールドワーク：書を持って街へ出よう 増訂版』新曜社

目 次

編者から（ウヴェ・フリック）	i
「SAGE 質的研究キット」の紹介	i
質的研究とは何か	ii
質的研究をどのように行うか	iii
「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲	iv
本書について（ウヴェ・フリック）	vii
はじめに	ix
1 章 イントロダクション——エスノグラフィーと参与観察	1
エスノグラフィーを用いた研究小史	1
社会文化理論とエスノグラフィー	3
エスノグラフィー——基本原理	18
定 義	18
方法としてのエスノグラフィー	19
産物としてのエスノグラフィー	20
スタイルと文脈としての参与観察	21
2 章 エスノグラフィーの有効性——エスノグラフィーの方法によって、 どのようなトピックを効果的かつ効率よく研究できるのか	25
エスノグラフィーの方法——その一般的有効性	25
エスノグラフィーによる研究の実例	25
エスノグラフィーの方法——研究上の特有の課題	27
エスノグラフィーの方法——研究の場面	33
3 章 フィールドサイトの選定	37
自己目録作りから始める	37
フィールドサイトを選ぶ	39
ラポール	42

4 章	フィールドでのデータ収集	47
	「事実」と「現実」	48
	メモ：応用的エスノグラフィーについて	49
	3つの主要な技法の領域	50
	観 察	50
	インタビュー	56
	文書研究	65
5 章	観察について	71
	観察の定義	71
	観察研究のタイプ	72
	観察研究の課題	75
	観察研究のプロセス	76
	妥当性の問題	78
	観察者のバイアス	81
	公共の場所での観察	82
	倫理と観察研究	83
6 章	エスノグラフィー・データの分析	89
	パターン	90
	データ分析のプロセス	92
	メモ：エスノグラフィー・データの分析における コンピューターの使用について	98
7 章	エスノグラフィー・データの表現方略	103
	伝統的な学術的形式でのエスノグラフィー・データの表現	104
	文書形式でのエスノグラフィー・データの他の表現方法	105
	文書を超えて	108
8 章	倫理的配慮	111
	研究に関係する倫理的配慮のレベル	111
	制度的機構	113
	研究倫理の個人的次元	116
	結 論	118

9章 21世紀のエスノグラフィー ————— 121

変化しつつある研究文脈——テクノロジー 121

変化しつつある研究文脈——グローバリゼーション 122

変化しつつある研究文脈——バーチャルな世界 124

訳者あとがき 129

用語解説 131

文 献 137

人名索引 143

事項索引 144

装幀＝新曜社デザイン室



1章 イントロダクション

—— エスノグラフィーと参与観察

エスノグラフィーを用いた研究小史

社会文化理論とエスノグラフィー

エスノグラフィー——基本原理

定義

方法としてのエスノグラフィー

産物としてのエスノグラフィー

スタイルと文脈としての参与観察



この章の目標

- 鍵概念であるエスノグラフィーと参与観察の操作的定義を知る。
- 「エスノグラフィー」は、方法と産物という2つの意味を持つ用語であることをそれぞれの定義を比較・対照しながら理解する。
- 参与観察とは、エスノグラファーに採用されるスタイルであると同時に、多様なデータ収集の技法が用いられる文脈でもあることを理解する。

エスノグラフィーを用いた研究小史

エスノグラフィーは、字義的には人々についての記述を意味する。エスノグラフィーでは、人々を個々人としてではなく、集合的な意味で扱うことを理解することが大切である。エスノグラフィーは、コミュニティとか社会と言われる組織化された持続的集団における人々を研究するための方法なのである。集団を特徴づける独特な生活のしかたが文化である。文化の研究には、集団の

人々に学習され共有された振る舞い方や慣習、信念を吟味することが含まれる。

人間集団研究へのエスノグラフィーを用いたアプローチは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ただ安楽椅子に座ってあれこれ思索するそれまでの社会哲学者たちの研究のやり方は、現実を生きる人々の日常世界を理解するのに不適切であると確信した人類学者たちによって始められた。彼らは、フィールドの中に身を置いてこそ、生身の人間の経験のダイナミズムに出会うことができると結論づけたのである。英国（と大英帝国の他の地域、後にはコモンウェルスの国々、たとえば、オーストラリアやインドなど）の研究者は、エスノグラフィーを用いた研究の1つの形式を開発した。それは、当時まだ植民地支配下にあった地域でのフィールドワークを反映するもので、アフリカや太平洋諸島のようなところは、伝統的な様式が保持された社会だと考えられていた。もちろん今から見れば、植民地化によってそれらの社会の多くは劇的に変化したが、100年前は、そのような社会は外部からの影響をそれほど受けずにいたと見なすことが可能であった。それゆえ、英国人研究者は、社会の持続的な制度の研究に注目したのであるが、このアプローチは、後に社会人類学と呼ばれるようになった。英国学派で最も影響力のある社会人類学者は、ラドクリフ＝ブラウンとプロニスロー・マリノフスキーの2人である（McGee & Warms, 2003, 特に pp.153-215 を参照）。

これに対して、アメリカ合衆国の人類学者たちは、ネイティブ・アメリカンの伝統的な生活のしかたに研究関心を抱いていたが、それは完全に破壊されたとまでは言えないまでも、既に劇的に変化していた。アメリカの研究者たちは、原住民が土着の条件を表現している社会制度の文脈の中で生きているとは期待できなかった。もしそうした社会制度の中に文化を見つけることができないのであれば、残存者の歴史の記憶を通して文化を再構築しなければならない。こうしてアメリカの人類学は、文化人類学と称されるようになった。最も影響力があったアメリカの文化人類学者は、フランツ・ボアズである。彼は、アルフレッド・クローバー、ルース・ベネディクト、マーガレット・ミード、ロバート・ローウィに代表されるアメリカの人類学者の全世代を育てた（McGee & Warms, 2003, 特に pp.128-152 を参照）。

マリノフスキーとボアズは、いずれもフィールドに基礎を置く研究の強力な唱道者であると同時に、参与観察として知られるようになったやり方——研究

者自身が研究対象とするコミュニティの中に身を置いて研究する方法——を提案した。第一次世界大戦期の複雑化しつつあった国際情勢の波に巻き込まれて、トロブリアンド諸島（西太平洋）でフィールド研究をしていたマリノフスキーは、4年間もフィールドサイトに留め置かれた。こうした予期せぬ事態が何回も起こることはほとんどありえないが、マリノフスキーによるトロブリアンド諸島のエスノグラフィーは、研究対象とする社会に研究者が長期間入り込んで達成した第一級の範例と見なされている。

フィールドに基礎を置く研究の開拓者たちは、自分たちは自然科学の方法と一致した方法に忠実に従っていると考えていた。しかし、彼らが分析しようとしているまさにそのコミュニティで生活したという事実は、分析に主観の水準を持ち込むこととなった。主観は、通常理解される自然科学の方法とは相容れないものである。

1920年代初頭、シカゴ大学の社会学者たちが、人類学者のエスノグラフィーによるフィールド研究法をアメリカの現代社会の社会集団研究に適用した（Bogdan & Biklen, 2003）。この「シカゴ学派」の影響は、やがて教育、ビジネス、公衆衛生、看護、マスコミュニケーションなどの分野にも影響を与えた。

社会文化理論とエスノグラフィー

エスノグラフィーの方法がさまざまな学問分野で広く採用されるに伴い、次に挙げるような広範な理論的志向と関連するようになった。

- ・ 構造 - 機能主義
- ・ 象徴的相互作用論
- ・ フェミニズム
- ・ マルクス主義
- ・ エスノメソドロジー
- ・ 批判理論
- ・ カルチュラル・スタディーズ